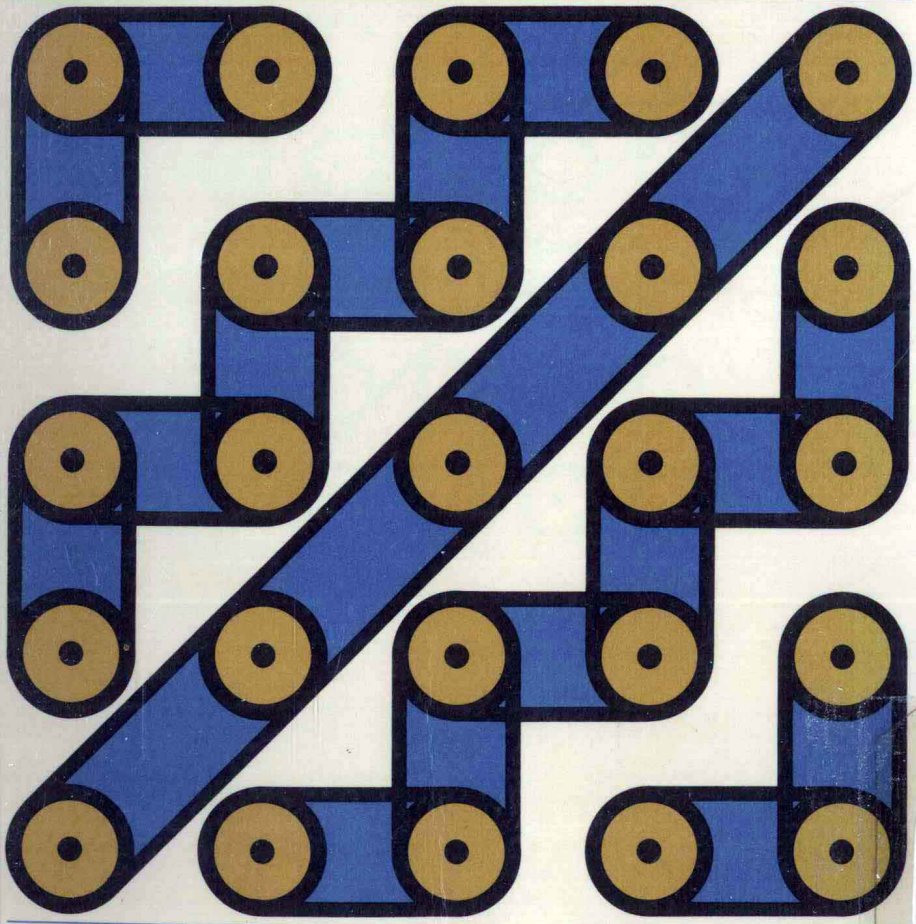
文学のおくりもの 17

晶文社

ジャマイカの烈風

リチャード・ヒューズ

小野寺 健訳



文学のおくりもの⑰

ジャマイカの烈風

1977年2月25日発行

著者—リチャード・ヒューズ

訳者—小野寺健

絵—小松崎茂

発行者—中村勝哉

発行所—株式会社晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12

電話—東京（255）4501〔代表〕・1841〔編集〕

振替—東京6-62799

印刷・製本—中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン—国東照幸

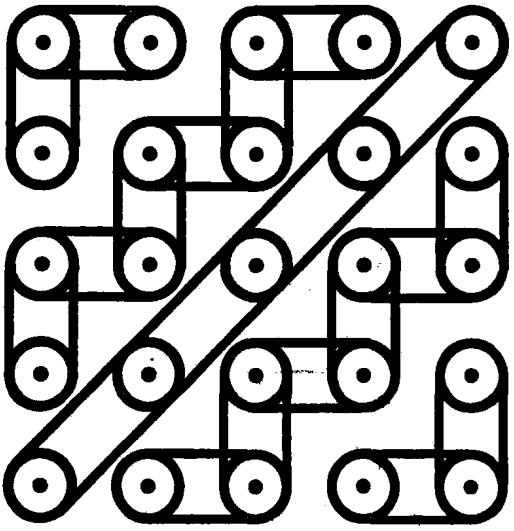
©1977年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

文学のおくりもの⑰

ジャマイカの烈風

リチャード・ヒューズ

小野寺 健訳



晶文社

Richard Hughes:
A HIGH WIND IN JAMAICA
First published in 1929
by Chatto & Windus, London
Japanese Copyright © 1977
by Shobun-sha Publisher, Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

絵・小松崎茂

第一章

西インド諸島の奴隷解放が生んだもののひとつは、数々の廃墟である。いまものこる屋敷の敷地内にもあれば、声をかければきこえるあたりに立っている場合もあるのだが、奴隷小屋、砂糖きびを挽く小屋、これを煮沸する小屋などが、みな廃墟と化してしまったのだ。金がかかりすぎて維持できない豪邸の廃墟も多い。地震、火事、雨、猛威をふるう植物などが、さらに荒廃をはやめた。

わたしの心にいまなおくっきり焼きつけられているひとつの光景がある。ジャマイカで見たものだ。ダービー・ヒルという名の宏壮な石造邸宅があった(パーカー一家が住んでいた家である)。この家はかつて繁栄を誇った農園事業の中心であった。奴隷解放とともに、この家も、他の家々同様破産した。糖業関係の建物は崩れおち、砂糖きびやギニア草は、雑草の猛威のなかで枯れた。農場で働いていた黒人たちは、仕事にかかずらう心配さえない土地を求めて、集団となって小屋を出て行った。つづいて屋内の仕事をする黒人たちの小屋が焼失すると、わずかにのこった三人の忠実な召使が邸宅を占拠した。これだけの財産を相続したパーカー家のふたりの娘はもう年をとっていた。しかも教育があるおかげでかえって何もできなかった。そしてわたしは、こんな光景を見ることになったのである。何か用事でもあったのか、ダービー・

ヒルまで行ったとき、腰まで埋まる雑草をかきわけながら正面のドアまでたどりついてみると、ドアはでたらめに枝をのばした木のために、もう、いつも開いたままになっていたのだ。窓についていたブラインドはすべて落ちてしまって、こんどは、はびこった蔓草が窓を覆い、室内を暗くしていた。そしてこの植物ばかりの惨憺たる暗がりのなかから、垢だらけの金糸銀糸の服を着た年よりの黒人女が顔をのぞかせたのである。すでに年老いたふたりのパーカー嬢は、ベッドの中で暮していた。着るものは、みな、黒人たちにとられてしまったからである。ふたりは餓死寸前であった。ひびのはいったウースター焼の茶碗ふたつにいれた水とココナッツが三つ、銀の盆にのってでた。そのうちに令嬢のひとりが彼女の専制君主たちを口説いて古いプリントのドレスを貸してもらうと、ごみ箱をひっくりかえしたような室内をふらふらと片づけはじめた。金泥と大理石のテーブルにこびりついた、鶏の古い血や羽を拭きとろうとする。恰好のついた話をしてみようとする。オルモルでめっきした時計を巻こうとする。しかしけっきょくはあきらめて、またふらふらとベッドにもどってしまうのだった。これからまもなく彼女たちは完全に餓死したのだ、とわたしは思う。あるいは、こんな豊饒な国でそんなことはありえまいと言うのなら、ガラスの粉でも飲まされたのだろうか——噂はさまざまであった。とにかく、彼女たちは死んだ。

こんな光景を見たら、忘れられるものではない。島のほんとうの姿をあかしてくれる事務的な統計のような、平々凡々たるありきたりの日常の事実など遠く及ばぬ、忘れがたい光景である。もちろん、過渡期のころでも、人々がこうしたメロドラマにふれる機会はあった。ただ、たまに断片的に見ていたのにすぎなかった。たとえば、その絶好の例は、ダービー・ヒルから十五マイルほどはなれた農園ファーンデイルである。そこに残っているのは農場監督の家だけで、本邸は完全に崩れおちて葬られてしまっていた。石造の一階は山羊と子供の遊び場、生活の場になっている木造の二階には、途中で一度まがる木の階段で上が

るようになっていた。地震のときには、二階がすこしずれただけだったので、大きなてこを使って、もとの位置にもどすことができた。屋根はこけら板であったが、ひどく乾燥した天気のあとではざるのように雨もりがして、雨季が来ると、さいしょの数日で、もう、ベッドとさまざまの家具のあいだを往復するしか雨水の防ぎようはなく、やがては家具もふやけてくるのであった。

わたしの記憶にあるころ、この家に住んでいたのはバス＝ソーントン一家である。この島の原地人すなわちクレオール（フランス系移民の子孫）ではなく、英国からわたってきた一家であった。バス＝ソーントン氏はセント・アンズに商用でもあるらしく、毎日らばにまたがって出掛けて行った。非常に脚の長い人で、その脚をちぢめるようにしてらばに乗ると、いかにもこっけいであった。それに彼自身らばにおとらぬかんしゃくもちときていたので、らばと彼とのけんかは、いつもなかなかの観物であった。

住居のすぐそばに砂糖きびを挽く小屋と煮沸する小屋の廃墟がある。このふたつは、かならずしもつながってはいない。挽く小屋のほうは高台にあって、垂直な巨大な鉄のローラーをまわすための水車がついている。ここから楔型の樋をつたって砂糖の液が煮沸室へ流れこむと、そこに黒人がひとり立っていて、草でできた刷毛で少量の石灰水をたらすと液が粒状に凝固するのである。これを大きな銅釜にあける。釜は薪だの屑、つまり砂糖きびのしぼりかすが燃えているかまどにかかっている。そのそばには二、三人の黒人がついていて、長い柄のついた銅のひしゃくで、煮立っている釜のうわずみをすくう。まわりには、仲間が座って、もうもうたる湯気の中で砂糖を食べたり、しぼりかすをしゃぶったりしているのだ。すくいとられたうわずみは床をつたって流れていく。これに汚物がいっぱいまじる――虫どころかねずみの死体までである。それに、黒人たちの足についていたものなら何でもまじるわけだ。――これを、またべつの桶でうけとると、蒸溜してラム酒にする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

とにかく、こうしたやりかたがとられていたのであった。わたしは近代的な方法を知らない――いや、それがあるとしても、一八六六年以来この島には行っていないのだし、もうずいぶん昔のことだ。

だが、この年をさかのぼるはるか前に、ファーンデイルでのこうした生活はいっさい終りをつげていたのだ。大きな銅釜は、みなひっくりかえって、上の挽き小屋には、三つの大ローラーがあたりかまわずころがっていた。水も流れてはこなかった。流れは勝手に他へ向きを変えてしまったのである。バス＝ソーントン家の子供たちは、排水孔を抜けて枯葉や水車の残骸などのちらばっているくぼ地によくもぐりこんだものだった。ある日、彼らはそこで山猫の巣をみつけた。親猫はいなかった。仔猫たちはひどく小さかったので、エミリーがエプロンにつつんで家へつれて帰ろうとした。しかし服の上から噛みついたりひっかいたりして、あまりどうもうだったので、一匹だけ残してみんな逃げてしまうと、彼女は――くやしくはあっても――大喜びだった。残ったトムは大きくなった。もっとも、ついにほんとうになつきはしなかったのだが。やがてこの雄猫は、彼らの飼っていた、年よりのおとなしい猫クランブルックに数匹の子を生ませた。そしてその子孫で一匹だけ生きのこったタビーは、なかなか有名な猫になった（だがトムは、やがて完全にジャングルに姿をけしてしまった）。タビーはよくなついて泳ぎがうまく、両手をつかって子供たちのあとから池を泳ぎまわっては、ときどき興奮した叫びをあげてよろこんだ。蛇と必死の格闘を演じたこともある。まるでただのねずみでもねらうように、がらがら蛇や黒蛇をねらうのだ。木の上や何かからとびかかって、格闘のあげく殺すのだった。一度タビーが噛まれたときには、どんなに苦しい死にかたをするだろうと思って、子供たちはわんわん泣いた。ところが猫は森へ行ったと思うと、きっと何か食べたのだろう、二、三日たつとぴんぴんしてもどって来て、あいかわらず平気で蛇を食べていた。

赤毛のジョンの部屋はねずみだらけだった。いつも大きな罠でつかまえては、また放って、タビーに片

づけさせるのである。一度、猫のほうが待ちきれなくなって自分まで罠にかかってしまい、夜になるまでぎゃーぎゃーわめいて罠を石にたたきつけては、もうれつな火花を散らしたことがあった。このときにも、二、三日たつと、つやつやとごきげんで帰ってきた。しかし、それきりジョンの罠は見えなくなってしまった。もうひとつ、彼を悩ませたのはこうもりで、これも何百羽となく彼の部屋に出没した。バス＝ソーントン夫人は乗馬用の鞭をならして、その翼を打ってはあざやかに殺した。しかし、そのために小さい箱のような部屋で夜中におこる騒動は、恐るべきものだった。耳を聾するような鞭の音がひびく室内は、すでにきーきーいうねずみの細く鋭い声でいっぱいなのである。

これは、両親たちにとってはどうでも、英国人の子供たちにとっては、天国のようなものであった。そのころの故国には、もう野性的な生活などまったくのこっていなかったのだから、なおさらである。ここでは、やや時代に先んじた生活をしなくてはならなかった。それとも退廃というべきだろうか。どちらでもいい。たとえば男の子と女の子のちがいにもまったく無頓着なままだった。髪など長くしておこうものなら、夕方草だにやしらみの卵をとるのに、どのくらい時間がかかっただろう。エミリーもレイチェルも短髪にしていて、男の子のすることを何でもさせてもらえた——木登りをし、泳ぎ、鳥や獣を罠でつかまえる。それどころか、服にはポケットがふたつもついていたのである。

彼らの生活の中心は、屋敷よりも水泳のできる池だった。毎年、雨季がおわると、流れをせきとめてダムをつくる。だから乾季のあいだじゅう、泳ぐには絶好の池ができるのだ。周囲は木立ちばかりだった。けばだった巨大な棉の木がある、それにかかえられるようにコーヒーの木、ロッグウッドもあれば、目のさめるような赤と緑のこしょうの木もある。こうした木々にかこまれて、池はほとんど完全に陰になっているといってよかった。エミリーとジョンは、この木立ちの中に枝でつくった罠をしかけた——びっこのサ

ムが作り方を教えてくれたのだ。よくしなう枝を切って、片方に紐をしばりつける。もう片方をとがらせて、餌になる果物を刺せるようにする。とがらせたすぐ下を、すこし平らにつぶし、まんなかに孔をあける。ちょうどこの孔の口にささるくらいの小さい木釘をつくる。つぎに紐の一端を環にする。枝全体を、弓に絃を張るときのように曲げ、いまつくった環をさっきの孔に通してから木釘をさしてとめ、釘のまわりを環がかこむようにする。餌をつけたら、小枝の多いところをさがして木にぶらさげる。鳥が釘にとまって餌をつつくと、釘はぬけて環が鳥の足にぱっとかたくからみつく。そうしたら、はなれた水の中から、鳥を狙う猿のように顔をだして、「どっちにしましょ」といったような掛け声で、首をひねって殺すか放してやるかをきめるのだ。――だから子供のほうも鳥のほうも、つかまえただけでは、まだ胸の高鳴る興奮は終わらないのである。

エミリーが黒人たちをもっと上等な人間にしてやろうという大望を抱いたのは、ごく自然なことだった。黒人たちも、もちろんクリスチャンではあったから、道徳の面では問題はない。食物や着る物にも不足はない。ただあまりにも無知なのである。さんざん押問答をしたあげく、彼らは、ようやく彼女にちびのジムを教えてもらうのを承知した。しかし何の効果もなかった。彼女はしっぽを落さないように家とかげをつかまえるのにも夢中だった。驚くと、すぐ尾を落してしまうのである。しっぽごとそっくりつかまえて、おとなしくマッチ箱におさめるには、たいへんな根気がいった。緑色の草とかげをつかまえるのにも、なかなか技巧がいる。座りこんで、オルフェウスのように口笛を吹きながら、とかげが岩のすきまから出て来て、怒って赤いのどを見せるのを待つのだ。それから長い草を投げ縄にしてぱっととらえた。彼女の部屋は、こんないろいろのペットでいっぱいだった。生きているのもいる。死んでいるのもあったろう。おかかえの妖精も何人かいたし、使い魔というか神託を告げてくれる、自在にしなう尾をもった白ねずみも一

匹いた。この白ねずみは、どんな難問でも、たちどころに解決してくれる。そのお告げはぜったいで――とくにレイチェル、エドワード、ローラといったちびたち（家族のあいだでは、まとめて「おちびさんたち」と呼ばれるようになった、）にはぜったいだった。白ねずみはその神託を解くエミリーだけは、もちろん特別扱いをしたし、エミリーより年上のジョンには、賢明にも、まったくふれようとしなかった。

白ねずみの力はいたるところに及んだ。妖精たちの魔力は、もっとかぎられた場所だけのものである。妖精たちは、葉のとがった二本の木に守られて、丘の穴に住んでいるのだった。

池でいちばんおもしろかったのは、先が三つ又にわかれた大木をつかう遊びだった。ジョンが太い幹のほうにまたがり、ほかの子供たちが、又のほうをもって押しまくるのである。もちろん、小さい子供たちは浅いところでばしゃばしゃやるだけだったが、ジョンとエミリーにはとびこみができた。といっても、ジョンは、ちゃんと頭からとびこめるが、エミリーのほうは、電信柱のようにつっぱって足からとびこむだけである。ところが、木登りとなると、彼女のほうが高い枝までのぼれた。いちど、彼女が八つになったとき、ソーントン夫人は、もう裸で泳がせる歳ではないと考えたことがある。だが、水着といっても間にあうのは古い木棉の寝間着しかなかった。エミリーがいつもと同じようにとびこむと、まず寝間着が空気でふくらんだために身体が逆さまになり、つぎには、ぬれた寝間着が頭と腕にかぶさって、もうすこしで溺れそうになってしまった。それきり、たしなみはおあずけになった。溺れる危険までおかすほどのものではないだろう――すくなくとも、ちょっと考えてみたところでは、そうとしか思えない。

ところが、あるとき、黒人がひとり、ほんとうにこの池で溺れたのだった。彼は盗んだマンゴをたらふく食べると、罪悪感に責められて、ついでに黒人が泳ぐのは禁じられている池にもはいってやれ、一回のざんげでふたつの罪を帳消しにすればいいと思ったのである。泳ぎは知らないし、いっしょにいたのは子

供（ちびのジム）だけだった。水が冷たかったのと食べすぎのせいで、彼は心臓麻痺をおこした。ジムはちょっと棒の先で彼をつついてみてから、こわくなって逃げだした。この男が心臓麻痺で死んだのか溺死したのかは、検死のときに問題になった。ファーンデイルに一週間泊りこんで調べた医者は溺死と断定したが、彼のからだには口の中まで、熟していないマンゴがつまっていたのだった。この事件が非常に好都合だったのは、黒人たちが死人の〈ダピー〉、つまり幽霊につかまるのをこわがって、それきりここで泳がなくなったことである。だからジョンやエミリーが泳いでいるときにちかよってくる黒人がいたら、ダピーにつかまったふりをしてみせると、すっかり仰天していちもくさんに逃げてしまうのだった。ファーンデイルの黒人で、ほんとうにダピーを見たことがあるものはひとりしかいなかった。しかし、それだけで充分だったのである。ダピーは、頭をのけぞらせていて鎖をもっているから、生きている人間とはまちがうはずがない。そして、ダピーに面とむかってダピーと呼んではいけないことになっている。そうすると相手がつよくなるのだ。ばかなこの男はそれを忘れて、見たとたんに「ダピー！」と叫んでしまい、ひどいリューマチにかかった。

びっこのサムは、たくさん話をきかせてくれた。彼は一日じゅう、ピメント（香料）を乾燥させる石の台の上にすわって、つま先にたかったうじをほじりだしている。子供たちには、はじめはこれがひどく気味がわるかったのだが、彼自身はいかにも満足そうだった。砂のみがむずむずしだして袋の形をした卵をそこに生みつけるのも、かならずしもいやな気持ではない。ジョンはそこを掻いてやっては、一種のスリルを味わった。サムは、彼らに、アナンシのいろいろな物語をしてきかせた。アナンシと虎の話だの、アナンシがわにの子供たちを養った話だの、それに子供たちの大好きになった、かわいい詩もひとつ知っていた。

いんちきサムは
いい人で、
くろんぼ踊りがうまいのさ、
スコッチ・ダンスにカドリール、
なんでも踊ったあげくには、
足のうらまでむけちゃった。

きっと、彼がびっこになったのは、そのせいなのだろう。愛想のいい男だった。たくさん子供があるという噂だった。

2

水浴びをする池にそそぐ流れは、森のなかの峡谷をつたってくるのだったが、ここはよだれのでるような探検の世界だった。けれども、子供たちはどういうものかあまり奥まで行かなかった。石という石は、かたはしからひっくり返してみて、ざりがにを探す。そうでなければ、ジョンが鉄砲をかついでいって、弾丸のかわりに水をいれると、かぼそい声で鳴きながら飛んでいる小鳥を撃つのだった。あまりにも小さく、獲物がかよわすぎて、弾丸で撃つ気にはなれなかった。それに、わずか数ヤード上には夾竹桃(きょうちくとう)の枝がある。葉は一枚もなく、枝がしなうほどの満開の花は目もさめるようだが、これをかくしてしまうほどの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c